

別記様式 2 - 2 号



視察研修等報告書

令和 7 年 9 月 1 7 日

坂井市議会

議長 佐藤 寛治 殿

会 派 名 志 政 会

報 告 者 後藤 寿和

1. 日 時 令和 7 年 9 月 3 日 (水) ～ 9 月 4 日 (木)
2. 研修先 3 日 (水)
東京ビッグサイト (有明) 東展示棟 及び 屋外会場
東京都江東区有明三丁目 10 番 1 号
4 日 (木)
産総研『臨海副都心センター』
東京都江藤区青海 2-3-26
3. 研修内容 3 日 (水) 東京インターナショナル・ギフト・ショー視察
4 日 (木) 産総研『臨海副都心センター』展示施設の視察
4. 参 加 者 後藤 寿和
5. 責 任 者 名 後藤 寿和

6. 内容詳細

3 日 (水) 東京インターナショナル・ギフト・ショー

第 100 回東京インターナショナル・ギフト・ショー秋 2025 は、2025 年 9 月に東京ビッグサイトで開催され、国内外から約 3,000 社が出展。生活雑貨、地域特産品、伝統工芸、デジタルガジェットまで幅広く展示され、同時開催のグルメショーでは全国の商工会による地域の食と観光の PR も充実。過去最大規模の来場者を記録し、販路拡大や地域活性化のヒントが得られる展示会。

4 日 (木) 産総研『臨海副都心センター』展示施設

『ライフ・テクノロジー・スタジオ』は、「出会う、つながる、はじまる」をテーマとした産学官連携の展示施設で、創薬推進や IT・人間工学に関する最新研究成果を来館者に体験・理解してもらうことを目的としています。

「デジタルヒューマン技術～みなが使いやすい製品デザイン、あなたに合わせた暮

らしサポート～」や「少子高齢化対策～人と機械の協働～」の視察研修を受けた。

7. 所見・感想等

第 100 回東京インターナショナル・ギフト・ショー秋 2025

東京ビッグサイトで開催された『第 100 回東京インターナショナル・ギフト・ショー秋 2025』を視察しました。日本最大規模の生活関連総合見本市であり、全国・世界からの最新商品や先進的な販促手法が一堂に会する本展示会は、地域振興や産業支援の観点からも多くの学びがありました。

会場は広大で、出展数も非常に多く、多様な分野における“売れる仕掛け”や“伝える工夫”が各所に見られました。特に、同時開催された「グルメショー」では、全国各地の商工会・商工会議所からの出展が目立ち、地元の特産品を活かした商品開発や、町の魅力を伝えるためのブース演出に各地域の創意工夫が凝らされていました。これらは、坂井市においても今後、地域資源をどのように掘り起こし、磨き上げ、外に向けて発信していくかを考える上で非常に参考になりました。

出展ブースで特に印象的だったのが「クラウドファンディングラウンジ」という出展エリアです。

ここでは、スマートグラスやスマホ関連の便利グッズ、AI を搭載した生活家電など、革新的でユニークな商品が並び、未来志向の商品がどのように世に出ていくのかを体感することができました。

単なる商品開発にとどまらず、「クラウドファンディング」を活用し、広く共感を得ながら資金調達・販路開拓を進めるという新しい流通の形を提案しており、地域における販路開拓や製品化支援にも応用可能な手法だと感じました。

こうした取り組みは、商工会に所属する地域事業者や個人事業主の新製品開発や販路拡大の支援体制づくり、ひいては地域産業の活性化に直結するものであり、行政と商工会や個人事業主が連携しながら、地域全体で「挑戦する風土」を育む契機になると感じました。

議会としても、地域の小規模事業者が持つアイデアや技術を、形ある製品へと昇華させる後押しができる制度設計や支援策が重要だと改めて認識しました。

全国の成功事例に学びながら、坂井市ならではの産業振興や地域活性化の政策提案に繋げていければと感じました。

産業技術総合研究所 臨海副都心センター

東京都臨海副都心にある産総研（産業技術総合研究所）を視察し、「少子高齢化対策～人と機械の協働～」をテーマに、展示施設「ライフ・テクノロジー・スタジオ」

を見学しました。展示やビデオでは、産学官の連携による未来志向の研究成果が分かりやすく紹介されており、技術の社会実装を視野に入れた内容に深く感銘を受けました。

コンビニなどでの品出し作業を行うロボット開発の現場では、商品ごとに大きさや重さが異なる中、人間は直感的に対応できますが、ロボットは決められたプログラム内でしか動けないため、その限界をどう超えるかが課題となっていました。産総研では、赤外線やモーションキャプチャー等の先端技術を用いて、作業効率の高い工程や動きを分析し、人間が苦手な作業をロボットが補完する仕組みの研究が進められていると聞きました。

また、同じ作業でも人によって得意・不得意が異なるため、個人に合わせた最適な分担を実現する“協働”モデルも開発されており、実際に作業効率が向上している事例も紹介されました。こうした研究は、今後の人口減少高齢化社会や労働人口減少に備えるうえで、極めて現実的で重要な視点だと感じました。

中でも注目したのが、創薬の現場で実際に導入されている汎用型ヒト型ロボット『まほろ』です。

『まほろ』は、人間と同じようにピペット操作や試薬の調合といった研究作業を正確かつ再現性高く行うことができ、24 時間連続での作業にも対応。専用機器に依存せず、人が使用している道具や設備をそのまま使える「汎用性」を備えている点に革新性を感じました。価格は 1 億円と高額ながら、熟練者の技術をデジタルで再現・継承し、作業の効率化と信頼性を飛躍的に高める力を持つ機器であり、今後の医療・研究現場における人材不足への有効な解決策として注目すべきと考えます。

またスタジオ内に 2 台のアザラシ型セラピーロボット「パロ」が座っており、何かと聞くと、説明をしてくれました。

パロは、使用者が声をかけたり撫でたりすることで反応が変化し、名前を呼び続けると覚えて反応するようになるなど、まさに“共に暮らすロボット”という印象を受けました。高齢者福祉の現場では、癒しや安心感を与えるだけでなく、認知症予防や情緒の安定に寄与しているとのことでした。

実際に自分でも抱き上げて撫でてみましたが、まるで本物の生き物のようにこちらを見つめ、まばたきや鳴き声で愛らしく反応してくれ、その感触や表情に思わず笑みがこぼれました。

坂井市の介護・福祉分野や障がいなどの現場にもこのようなロボット活用が導入されれば、心のケアを支える新たな選択肢として非常に有効だと感じました。

一点非常に強く感じたのが、坂井市には、産総研の拠点の一つである「北陸デジタルものづくりセンター」が既に立地しており、全国に誇れる研究開発環境が身近にあります。

このような先進的研究がすでに坂井市内でも展開可能であるにも関わらず、市としての連携がほとんど見えてこないという点です。行政・企業・教育機関などとの有機的な連携が進んでいない現状は極めてもったいなく、今後は地元企業の課題解決や人材育成にもつながる形で、積極的に産総研との連携を図るべきだと強く感じました。



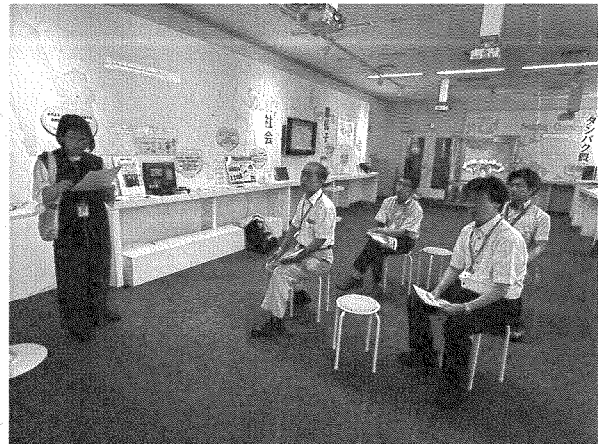
東京ビッグサイト



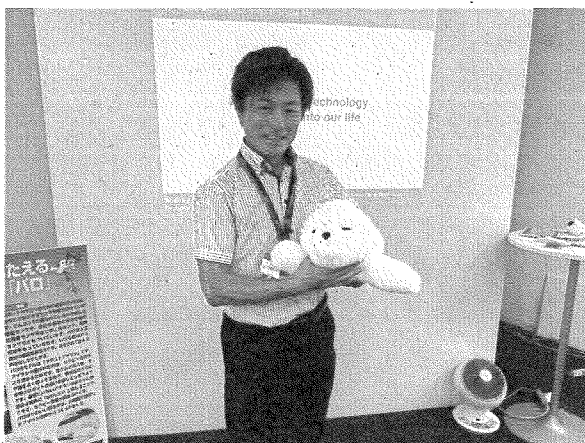
会場



産業技術総合研究所臨海副都心センター



研修風景



アザラシ型セラピーロボット『パロ』



汎用型ヒト型ロボット『まほろ』